

明るい世界を願って

西野 えみ子

不要不急の外出自粛が求められた 2020 年、私には急を要する出来事が多い年でした。レビー小体型認知症で、グループホームで暮らしていた母の状態に変化が現れたためです。

もともと幻視が特徴的な症状としてありましたが、母にとって不快な幻視が多くなってきたのか、2019 年の秋ごろから落ち着きがなくなったり、眠れなくなったりといった状況になりました。そして暴言、暴力も出はじめ…。それまで約 3 年お世話になっていたグループホームですが、スタッフの方々にも相当なご苦勞をかけ、2020 年になり服薬調整のための入院を勧められる事態となりました。

病院ではなく、なるべく母らしい暮らしができる場所はないかと、妹とともにさまざまなところに相談に出向きました。地域包括支援センター、レビー小体型認知症の家族会、認知症専門病院の相談室…。そんななか、母の状況を知り、入居を引き受けてくれる新たなグループホームが見つかりました。

関係機関が連携してくださり、あっという間に母の転居が決まりました。緊急事態宣言が出される前ではありましたが、コロナ感染の危機が高まりつつある中での引越しでした。

さまざまな方に助けていただき、奇跡的な展開でした。感謝しかありません。

そんな母も、10 月末に誤嚥性肺炎により 85 歳で他界しました。コロナを気にしながらの葬儀、そして 12 月には四十九日の法要と納骨を済ませました。あの世で、父に会っていることと思います。

母の死から 1 か月後には、孫の誕生もありました。

今年は、父の十三回忌。父が「その声が良い」と言っていたルイ・アームストロングの歌を、最近あらためて聞いています。今も、一步外を出れば誰もがマスクで顔を覆い、人との距離をとり、気軽に握手もできない日々です。だからこそ、彼の歌う「What A Wonderful World」が心に沁みました。

緑の木々 赤いバラ

それらはあなたと私のために咲いているようだ

そして私は思う なんて素晴らしい世界だろう

青い空 白い雲
明るく祝福された日 暗く神聖な夜
そして私は思う なんて素晴らしい世界だろう

空には虹がかかる
行き交う人たちの顔にも
友人たちが「元気かい？」と握手している

でも 彼らは本当は「愛してるよ」と伝えているんだ
赤ちゃんの泣き声を聞き そしてその成長を見守る
彼らは私よりもずっと多くのことを学ぶだろう

そして私は思う なんて素晴らしい世界だろう
そう 私は心から思う なんて素晴らしい世界だろう